

渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい

司祭 シモン 林 永寅

4ヶ月ぶりに共に礼拝を捧げるためにここに集まってくださった皆さんを主のみ名によって歓迎いたします。

私は先週、説教を通して、共に礼拝を捧げることができなかったこれまでの4ヶ月の間は、イスラエルの民が荒れ野でさまよった40年より長く感じられた、と申し上げました。皆さんも同じ気持ちだったでしょう。それゆえ、今日の礼拝は何とも表現できないほど嬉しいです。相変わらずコロナウイルスが続いているにもかかわらず、喜んで出席していただき、感謝いたします。神様はこの礼拝を喜んで受け入れ、自粛しながら過ごしてきた私たちを慰め、祝福してください。

今日ご一緒に読んだ福音書のみ言葉については、イエス様が自ら説明してくださっています。ですからここに解説を加えることは蛇足になるかもしれません。けれども、私たちの人生と関連させて理解を試みようという意味で、一言を付け加えたいと思います。

農夫が種を蒔くという表現は、イエス様がみ言葉を宣べ伝えることを意味します。農夫が種を蒔いた土地は四つのところです。道端、石だらけのところ、茨の間、そして良い土地です。この四つのところは皆人々の心を意味します。道端はみ言葉を聞き流す人の心を意味します。そのような心を持っていたら、悪い者が来て、み言葉の恵みを横取りしてしまいます。石だらけのところは、み言葉を聞いてはいますが、そのみ言葉を信じることができず、試練や迫害に崩れてしまう人の心を意味します。茨の間は、この世の誘惑に負けてしまう人の心を意味します。一樣に、み言葉を自分のものにする事ができない様子です。この喩えは、人々の心がすでに決まっているから仕方ない、という意味ではなく、皆が良い土地になって多くの実を結びなさい、という意味でおっしゃったみ言葉です。

ところで、ある方は、「農夫であるイエス様は、なぜ道端や石だらけのところや茨の間に種を蒔くのか」と問うかもしれません。もちろん、農夫が種をよく育つ良い土地だけに種を蒔くのが効果的でしょう。けれども、人の心はいつも良い土地になっているわけではありません。時折石だらけのところのように変わったりもします。このような事情をよくご存じであるイエス様は人に分け隔てをしません。この世のすべての人に福音を宣べ伝え、救おうとなさいます。今日ご一緒に読んだイザヤ書にはこのように記されています。

「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。」(イザヤ 55:1)

このみ言葉を信じて従う時、私たちは救いを得られます。

私たちの信仰のためのみ言葉は、今日ご一緒に読んだローマ書にも記されています。ローマ書は、

み言葉に従う人生を通して、私たちは「神の子」となり、「神様の相続人」になる、ということをお教わっています。

けれども、この世の中にはイエス様のみ言葉を受け入れる人と、そうでない人がいるものです。それでイザヤ書には、道端や石だらけのところ、いばらの間のような心を持って生きていく人々に向けてのこのような訴えが記されています。

「なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、飢えを満たさぬもののために労するのか。」(イザヤ 55:2)

それでは、私たちは良い土地となって多くの実を結ぶために、どうすれば良いですか？ 色々な方法があると思いますが、私は、皆さんに聖書を繰り返して読むことをお勧めします。ある方は、「すでに昔、聖書を読みきったのですが、また読む必要があるのか」と尋ねる方もいるかもしれません。けれども、聖書はいつも今日、今、読むべきものです。そして、繰り返して読んで、また読まなければならないものです。ご飯を噛んでまた噛むと、甘みが出てくるように、聖書のみ言葉も読んでまた読んでみると、甘みが出てくるのです。この甘さは、ご飯が体に生気を与えるように、魂に生気を与えます。

皆さんはフィンセント・ファン・ゴッホという画家をよくご存じでしょう。ゴッホの作品には熱い心が込められているから、多くの人々に愛されていると思います。私がゴッホについて話をする理由は、彼の作品の中に「種まく人」という絵があるからです。しかし事実、ゴッホのこの「種まく人」という作品は、ミレーの同じタイトルの絵を模写したものでした。ミレーのこの絵は、フランス革命期だった当時の民衆に対する愛情をうまく表現したリアリズムの作品としてよく知られていました。それでゴッホがこのような表現方法を学ぼうとやっと思ったと思われるかもしれません。もちろん、そうかもしれません。けれどもゴッホが目にしたのはそれだけではありません。むしろもっと大事に思ったのはこの絵の信仰的なメッセージです。この絵はほかでもない聖書の「種まく人の喩え」を紹介しているからです。それでゴッホは、ミレーを心からの師として仕えながら、ミレーの「種まく人」を繰り返して模写しました。今残っているゴッホの「種まく人」は 20 点を超えるそうです。どこかで、ゴッホの模写は単なる模写に留まりませんでした。ゴッホはこの模写の過程を通して自分なりの絵を描き始めたのです。朝種まく人、日没の種まく人、荒涼たる野原で種まく人…。そして、このように繰り返して描いた彼の絵は、ミレーよりもっと強烈なメッセージを表わすようになりました。ミレーの絵の主人公よりもっと堂々たる様子で種を蒔いているし、多くの実を結ばせるという強い意志を見せているようです。それでミレーの絵より素晴らしい作品のように見えます。これは、もしかしたら、度重なる模写を通して得た悟りの結果であるかもしれません。

そして、ゴッホは絵の模写を繰り返しただけではなく、聖書も繰り返して読んだのでしょう。ゴッホはその後、善きサマリア人、ラザロの復活、天使、ピエタのような聖書の物語を主題とする絵を数多く描きましたので、この事実を通して彼の信仰が推測できます。

ゴッホの人生の最後についてご存じである方は、「ゴッホの人生は不幸な人生だった」とおっしゃるかもしれません。けれども、ゴッホを深く研究した人々は、ゴッホが「苦難の足取りで叫びながら、真理を求めていった魂の求道者であった」と評価します。それは、ゴッホが誰よりも貧しい者と共にし、貧しい者のために生きていこうと苦しみながら、神様の愛を実践した信仰者だったからです。それでゴッホは手紙に「神様を愛する最も良い方法は世界のすべてを愛することである」という一言を

残しました。ゴッホの人生は、良い土地に蒔かれた種だったかもしれません。

では、話をまとめようと思います。

神様は、私たちの人生が救いの人生になるのを願っておられ、私たちの胸の中にみ言葉の種を植えつけようとされます。今や私たちに必要なのは、「良い土地」を作ろうという決意と努力ではないでしょうか。私たちの「心の畑」にある石をとり出し、土地を肥やし、種を蒔いた後は雑草も取り除いてあげましょう。そうすれば、きっと多くの実を結ぶようになるでしょう。

今日ご一緒に読んだ福音書にはこのように記されています。

「御言葉を聞いて悟る人は…あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」(マタイ 13:23)

皆さんはこの豊かな実りの主人公になるでしょう。

この一週、イエス様のみ言葉に頼りながら、「心の畑」を耕して、救いの恵みを豊かに受けられますように心よりお祈りいたします。

~~~~~

7月12日の礼拝は、こちらでご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=KUYIC5RGkKk>